



矜持、惻隱の情、そして絆

レンゴ―社長 大坪 清

「二心の塔」絆 3・11。これは先の東日本大震災で壊滅的な被害を受けたレンゴ―仙台工場を再興し、今年3月の完成を目指して建設を進めている新仙台工場に設置するモニユメントの名称である。先頃、社内公募により決定したものだ。未曾有の災厄にあっても、みんなの心をひとつにして困難に立ち向かい、お互いの信頼の絆を忘れない。そんな思いが込められている。

社会の成熟化とともに、わが国の政治・経済・社会の諸制度が、政治的均衡の下でこのまま放置すれば、制度疲労から制度破綻に向かうことは目に見えている。さらに東日本大震災の発生で、国民生活と社会経済システムの再興、原発を含むエネルギー政策の再検討など、あらゆる方面での改革は待ったなしである。

2000年頃からIT革命といわれ、世界はニューエコノミーへと変革してきた。それはITのみならず、ニューリテイクエター、社会の変革をも伴うべき

ものであったが、現実には、雇止めや派遣切りといった1990年代と何ら変わらない動きがわが国では続いた。

社会を新しく、安定化させるためには、雇用についても一度よく考える必要がある。人間、つまり心と心のつながりを大切に誰のものかという議論がはじつたが、最近では会社のさまざまなステークホルダーの中で、従業員が一番大切と考える向きが増えてきたことは大変喜ばしいことだ。

労働は一番神聖なものだ。これを切り捨てるようでは、本当の社会の改革はできない。新しい社会の在り方、体制のイノベーションには、労働すなわち働く者一人ひとりの価値、心のありようと真剣に向き合うことだ。

アダム・スミスは『道徳感情論』の中で、経済を動かす要素は人間の心理であり、モラリティー(道徳)、エシックス(倫理)、フィロソフィー(哲学)、センチメ

ント(感情)、シンパシーの5つだと述べている。最後のシンパシーとは、日本語で言うところの「惻隱の情」だ。相手を思いやる心。今度の震災で「絆」という言葉が見直されたが、今の日本に必要なのは「惻隱の情」と「絆」、そして「矜持」の3つではないだろうか。矜持を英語でいえば「セルフ・コンフィデンス」、つまり自分の強さに自信を持つことだ。

先の大震災からの復旧においても、この3つが目を見張る現場力として遺憾なく発揮されたことは記憶に新しい。アダム・スミスは『国富論』で、あの有名な「インビジブルハンド」に触れている。要は人間と人間は「見えざる手」で結ばれていることだ。

これからの社会づくりにおいて大事なことは、先の5つの人間心理をベースとして、「矜持」と「惻隱の情」をもって物事にあたるということだろう。そこから「見えざる手」という信頼の「絆」も生まれてくるのだ。

本連載は、大坪清、海江田万里、北川正恭、茂木友三郎、清田瞭、平沼赳夫の各氏が担当します